

## 八 災害と疫病

## 1 地震と干害

安政元年地震 一八五四年(安政元)十一月三日・四日の地震を前触れとして、五日の午後四時ごろから大地震が襲来した。『塩屋記録』は次のように描写している。

安政元甲寅年十一月四日朝四ツ時地震あり、明五日夕七ツ時前より前代未聞の大地震なり、六ツ時ごろまで極々大ゆり、この夜ゆりやまず、町内人々御屋敷前または浜浦殿町前などにて当夜明ける、地震ゆり止みなく候ゆえ、当時総方小屋ずまい、当夜御奉行様、御目附様、御手代様、またまた町御役人御回りこれ有り、町内は戸締り致さず、町はなれにて回り番致し候、両町共家痛み多し、湊町新町通り、横町上浜、灘町浜、格別大痛み、家倒れ痛み多し、米又下女おだれにて死す、梶野長三郎せがれおだれにて死す、浜いづ八妻死す、米亀津吉鶴どふしを痛め、灘町方にも即死手疵てずこれあり、多人数によって名前除く、浜方にて地われ候処あり、汲みための水吹出る、波戸石垣大痛み、外に色々痛み多し、道後温泉出やむ、石どふろ、とりゐ、橋などは皆いたむ、誠に神力の御蔭をもって夜中にてはなし、昼ゆえ人痛み少し、明六日より十日ごろまでは毎度々々ゆり、十一日より二十日まで時々ゆり、廿一日より三十日までゆり、十二月に入ては時々少々小ゆりなり、当歳中時々じしん、右大地震の節真木藤治郎殿米を、手まみに取り候者ござ候て、御上体様より御屋敷前にてさらし、右トガ人名前除く、又々灘町大黒屋くずしを取り候ものもござ候、この人も御上体様よりきつと御トガメこれあり、総方その後御免これあり、真木・大黒屋両家よりも御ナゲキを申上げ候。

大地震につき三町へ御上体様より御貸附銀百貫目御下げ成され候、当代御奉行山本加兵衛尚徳様代。

『村諸日記』(『市場佐伯家文書』)も次のように記録している。

十二月四日朝五ツ時地震少々、五日同断、七ツ半後大地震長ゆるぎ申し候、同夜数十度ゆり申し候、十日御屋敷(藩出張所)へまかり出で申し候、御屋敷総かこい倒れ申し候、御蔵大破、灘町大破、湊町三〇程残らず倒れ申し候、前代未聞の大地震にて、いずれも小屋かけ居申し候、小屋住居は二十日ごろまで致し居り申し候、津波等評話につき、両三谷の者一統行道山に登り騒動一通りならず。

安政四年地震 一八五七年(安政四)八月二十五日午前、またもや大地震に襲われた。前回よりはやや小さ

かったが、夜明けまでに三〇余度の余震があった。大洲城内の被害は今度の方が大きかった。郡中方面については『塩屋記録』が次のように記す。

安政四年八月二十五日四ツ時<sup>(二〇時)</sup>、前々通り大地震なり、上野屋治助子芳太郎、町御番所の塀に敷かれて死す、小川屋重太郎妻、外に大津屋丈助妻、上野屋治助娘、常夜燈笠石に敷かれ怪我致し候、両町とも家痛みこれ有り、門塀古家などは倒れ、夜分は往来どめ、番人家持二人ずつ、当時少々揺る、御庄屋前東浦浜浦にて小屋住居、九月入って追々我家へ帰り候。

大洲藩としてはこの両度の地震だけでなく、安政二年の江戸大地震での被害も莫大であった。そのため大洲城修理にも苦痛は深刻で、領内に借上銀を命じ、村村富裕者には人夫三〇人役以上の加勢を申しつけた。庄屋らもこれに準じて申合せにより銘銘五〇人役を引請け、代銀を翌安政五年に上納した。郡中全体では次のようであった。(『郡中役用控』伊予史談会蔵)。

覚

- 一 銀札貳貫五百目 庄屋分
- 但加勢夫五百人分 老人前五匁ツツ
- 一 同 四貫目 村方
- 但右同断卷千人分 老人前四匁ツツ

右之通上納仕候。

安政五年戊午八月

郡 中

干 害 一八五三年(嘉永六)はきわめて雨量が乏しく、五月から七月中まで干天が続いた。各地で雨乞いが行われた。郡中地方でも五月二四日から雨に恵まれなかったため、七月八日町にはしり出て雨乞い踊り

を行った。すぐ続けて一日には浜で千人踊りを実施した。八月二日に至って七〇日ぶりに潤雨を得て、農民はようやく眉を開いた(『半窓日記抄』伊予史談会蔵)。

一八五六年(安政三)は郡中地方だけが雨に恵まれなかった。村村は相談して次のように神に降雨を祈った。

- 七月 八日 伊予岡八幡社 二夜三日祈禱
- 同 二四日 同 一昼夜祈雨祭(藩執行)
- 同 二八日 谷上山宝珠寺 二夜三日祈禱
- 八月 三日 伊予岡八幡社 二夜三日祈禱
- 同 六日 行道山 二夜三日祈禱(神主自力)
- 同 七日 伊予岡八幡社 二夜三日祈禱(藩執行)
- 同 九日 谷上山宝珠寺 三日三夜祈禱(寺自力)

祈禱を繰返したが効験はなかった。村村はさらに八月一五日浜番所下の浜で千人踊りを行った。村村に出動人員を割付け、裁許役人に引率させた。銘銘田糞・たくら笠持参で村幟<sup>むらぼり</sup>を用意、太鼓は見計らいでよいとされた(『和田家文書』和田篤蔵)。

一八六一年(文久元)は前年の田畑不作に加えて米価が高騰し、村方の苦しみは一通りではなかった。しかも五月初旬以来干天が続き、六月に入ると領内村村では雨乞総踊りが多くなった。郡中地方では六月二三日・二四日に、戎社<sup>えびす</sup>で灘町・湊町が一日ずつ雨乞踊りを行った。なお雨が得られなかったため、七月二日浜番所下の船蔵を中にし、そのまわりで総村千人踊りの雨乞いを実施した。新谷領村村も参加した。ようやく七月

疫禍

一六日に雨が降り始め、一七日には大雨となった(『塩屋記録』)。